

白木念仏御法語

底本 井川定慶編『法然上人伝全集』所収

「法然上人行状絵図」第四十七卷

(昭和五十三年六月 三版本)

対校本 因……『法然上人伝全集』所収

「九卷伝」

釋……森 英純 筆写本

白木念仏御法語

このひじりの意巧にて人の心得やすからむために、自力根性の人にむかひては、白木の念仏といふ事をつねに申されにけり。その言には、自力の人は、念仏をいさざるなり。或は大乗のさとりをもちて色どり、或はふかき領解をもちていさざるなり、或は戒をもちていさざるなり、或は身心をととのふをもて色どらんと思なり。定散のいさざるなり、或は念仏をば、しおほせたり、往じやうたがひなしとよろこび、いさざるなり、念仏をば、往生はえせぬとなげくなり。なげくも、よろこぶも、自力の迷なり。大經の法滅百歳の念仏、觀經の下三品の念仏はなにのいさざるもなき、白木の念仏也。本願の文の中の至心信樂を、称我名号と釈給へるも、白木になりかへる心也。所謂觀經の下品下生の機は仏法世俗の二種の善根なき無善の凡夫なるゆへ

① 因この……意巧にて「なし」

② 因自力……むかひては「なし」

③ 因申されにけり「仰られき」

④ 因その言には「なし」

⑤ 因因じゃうたが「生疑」

⑥ 因よろこぶも「よろこぶもどもに」

⑦ 因所謂「習所の」

⑧ 因なき「を」

に、なにの色どり^①もなし。況や死苦にせめられて忙然となる上は、三業ともに正体なき機なり。一期は悪人なる故に、平生の行の、さりとるとたのむべきもなし。臨終には死苦にせめらるゝ故に、止悪修善の心も、大小権実のさとりも、かつて心にかず、起立塔像の善も、この位^②にはかなふべからず。捨家棄欲の心も、このときはおこりがたし。まことに極重悪人なり。更に他の方便ある事なし。もし他力の領解もやある、名号の不思議をもや、念じつべきと、をしふれども、苦にせめられて、次第に失念するあひだ転教口称して、汝若不能^③念者、応称^④無量寿仏といふとき、意業は忙然となりながら、十声仏を称すれば、声々に八十億劫の罪を滅して、見金蓮花、猶如日輪の益にあづかる也。この位には機の道心もなく、定散の色どり一もなし。たゞ知識のをしへにしたがふばかりにて、別のさかしき心もなく、白木にとなへて往生する也。たとへば、をさなきものゝ手をとって、物をかゝせんがごとし。あに小

① 因一「なし」

② 因もなし「なく」

③ 因位「儀」

④ 因極重悪人「極重の悪人」

⑤ 圍べきと「べきやと」

⑥ 因は「なし」

⑦ 因を「の」

⑧ 圍八十億劫「八十億劫生死」

⑨ 因て「なし」

⑩ 圍因道心「道心一」

⑪ 因知「智」

⑫ 圍をさなきもの「幼者」

児の高名ならんや。下々品の念仏も、又かくのごとし。たゞ知識と
 弥陀との御心にて、わづかに口にとなへて往生をとぐるなり。弥陀
 の本願は、わきて五逆深重の人のために、難行苦行せし願行なる
 故に、失念の位の白木の念仏に、仏の五劫兆載の願行つづまりいり
 て、無窮の生死を一念につゞめて、僧祇の苦行を一声に成ずる也。
 又大經の、三宝滅尽の時の念仏も、白木の念仏なり。その故は、大
 小乗の経律論、みな龍宮におさまり、三宝ことごとく滅しなむ、閻
 浮提には、冥々たる衆生の、悪の外には善といふ名だにも、更にあ
 るべからず。戒行ををしへたる律も滅しなば、いづれの教によりて
 か、止悪修善の心もあるべき。菩提心をとける経もしさきだちて滅
 せば、いづれの経によりてか、菩提心をもおこすべき。このことは
 りを、しれる人も世になければ、ならひて知べき道もなし。故に定
 散の色どりは、みなうせはてたる、白木の念仏、六字の名号ばか
 り、世には住すべきなり。そのとき聞て一念せん者、みなまさに往

① 因の「なし」

② 因知「智」

③ 因御「なし」

④ 因の「なし」

⑤ 因いり「なし」

⑥ 因大「なし」

⑦ 因は「に」

⑧ 因り「る」

⑨ 閻因冥々「唯冥々」

⑩ 因か「なし」

⑪ 因もし「巻」

⑫ 因か「なし」

⑬ 因おこす「教」

生すべしとくけり。この機の一念十念して往生するは、仏法のほかなる人の、たゞ白木の名号の力にて、往生すべきなり。しかるに、当時は大小経論もさかりなれば、かの時の衆生には、事の外にまされる機なりと、いふ人もあれども、下根の我等は、三宝滅尽の時の人にかはる事なく、世は猶仏法流布の世なれども、身はひとり三学無分の機なり。大小の経論あれども、つとめ学せむと思ふ心ざしもなし。かゝる無道心の機は、仏法にあへる甲斐もなき身なり。三宝滅尽の世ならば、力およばぬかたもあるべし。仏法流布の世に生ながら、戒をもたまず、定恵をも修行せざるにこそ機のつたなく、道心なき程もあらはれぬれ。かゝるをろかなる身ながら、南無阿弥陀仏と唱ところに、仏の願力ことごとく円満する故に、こゝが白木の念仏のかたじけなきにてはあるなり。機においては、安心も起行も、まことすくなく、前念も後念も、みなをろかなり。妄想顛倒の迷は、日ををうてふかく、ねてもさめても、悪業煩惱にのみ、ほど

① 圓大小「大小の」

② 因に「なし」

③ 因く「し」

④ 因世「世に」

⑤ 因つとめ「なし」

⑥ 因つとめ「或」

⑦ 因心ざし「者」

⑧ 圓かた「二方」

⑨ 因は「なし」

⑩ 因も「なし」

⑪ 圓まこと「誠」

⑫ 因迷「惑」

⑬ 圓をう「追ふ」

され居たる身の中よりいづる念仏は、いと煩惱にかはるべしともおぼえぬうへ、定散の色どり、^①一もなき称名なれども、前念の名号に、諸仏の万徳を撰する故に、心水泥濁にそまず、無上功徳を生ずるなり。中々に心をそへず、申せば生と信じて、ほれぐくと南無阿弥陀仏となふるが、本願の念仏にてはあるなり。これを白木の念仏とは、いふなりとぞの^②給ける。

^③曰上見于
門弟記録

①因も「なし」

②因の給「仰られ」

③因曰上見于
門弟記録「なし」